

学長候補適任者推薦書

単独推薦
 連名推薦

令和元年6月13日

国立大学法人山形大学
学長選考会議議長 殿

推薦(代表)者氏名 大西彰正 (自署)

私は、本人の承諾を得て、下記の者を国立大学法人山形大学学長候補適任者として、関係書類を添えて推薦します。

記

玉手 英利

- (注) 1. 推薦方式について、本書類名称の右側にある「 単独推薦」又は「 連名推薦」の何れかにチェックを入れること。
2. 連名で推薦する場合は、推薦代表者が本書類を作成すること。
3. 用紙は、日本工業規格A4判・縦型とすること。

推薦者名簿

学長候補適任者氏名 玉手 英利

No	所属等	職名	推薦者氏名
1 (代表)	学術研究院(理学部主担当)	理学部長	大西彰正
2	学術研究院(人文社会科学部主担当)	人文社会科学部長	清塚邦彦
3	学術研究院(工学部主担当)	工学部長	飯塚 博
4	学術研究院(農学部主担当)	農学部長	木田光祐
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			

- (注) 1. 単独での推薦の場合は、本名簿の作成は不要とする。
2. 「所属等」「職名」及び「推薦者氏名」欄は、全て自署によるものとし、名簿の先頭 No1(代表)には推薦代表者が記入すること。
3. 役員は「職名」と「推薦者氏名」欄のみ記入し、経営協議会委員は「所属等」には「経営協議会」、「職名」欄には「委員」と記入すること。また部局長は「職名」欄に当該部局長名を記入すること。
4. 教員にあっては、「所属等」欄については所属と主担当教員として配置された教育研究組織等を記入すること。【例：学術研究院（人文社会科学部主担当）】
5. 用紙は、日本工業規格A4判・縦型とすること。

推薦理由書

学長候補適任者氏名 玉手 英利

玉手英利氏は、平成15年4月に山形大学に着任し、平成20年4月より理学部副学部長を5年間、平成25年4月から理学部長を6年間務められた。この間、教育研究評議会評議員として本学の基本理念・将来構想・教育課程の編成等に多大な貢献をしてきた。特に、教養教育改革においては、人間力の育成を目的とした学士課程教育の改革に取り組み、基盤教育の基本理念や基盤教育院の構築で中心的役割を果たした。さらに、大学院理工学研究科（理学系）博士前期課程の強化では、「理学系大学院生の職業観形成を目的とした学習プログラムの開発」（平成23－27年度文科省概算要求事項特別経費）を立案・実施し、全国の理学部に先駆けて理系大学院生の多様化に対応したカリキュラム改革を、所有する資源を最大限に活用して戦略的にマネジメントした。

理学部長在任時には、将来を見据えた学部の機能強化に着手し、教育研究を強化する明確な改革ビジョンを掲げ、構成員を指揮監督して強いリーダーシップを発揮し、理学部創設以来の大変革となる1学科化への改組や、社会や時代の変化及び地域ニーズを捉えたデータサイエンスカリキュラムの導入を行った。並行して大学院の更なる機能強化と持続的な学生定員確保を目的として、理学系5専攻を1専攻として再編する等、大学院改革に積極的に取り組んだ。

平成28年10月からは小白川キャンパス長を兼務し、人文社会科学部、地域教育文化学部、理学部、学士課程基盤教育機構等を取りまとめながら、ネーミングライツやクラウドファンディングなどの新たな外部資金を導入する等、大学の資源を活かした戦略的なマネジメントを展開している。

自身の研究活動では、メラニン合成系の突然変異に関する研究結果をSCIENCEに発表する等、野生生物の遺伝学的研究を国内外で展開している。特に、アジア地域の野生生物に関しては多くの新知見を国際学術誌に発表する等、国際的視野に立った活動を行っている。また、環境省や自治体の生物多様性、外来種、有害動物等の調査・研究を数多く担い、山形県や宮城県の実環境審議会委員や環境省総合研究開発推進会議検討員等を歴任し、幅広い活動を展開している。学会および社会活動では、日本動物学会理事として公益社団法人化を手掛けるなど、組織改革に豊富な経験を有している。基盤教育や専門教育、研究室等での学生教育活動では、熱意をもって学生指導にあたられ、その高潔な人格と優れた学識により、卒業・修了生から敬愛を集められている。

以上のように、玉手氏は教学・経営の豊富な実績と先見性を備えており、山形大学学長選考基準に照らし合わせ、人格、学識、指導力のすべてにおいて山形大学のトップリーダーに相応しい人物と判断でき、次期学長候補の適任者として強く推薦するものである。

(注) 1. 推薦理由は、学長選考基準を踏まえ、1,200字以内で作成すること。

2. 用紙は、日本工業規格A4判・縦型とすること。

同 意 書

私は、国立大学法人山形大学学長選考等規定大5条第4項に規定する学長候補者として推薦されることに同意します。

日 付 令和 元年6月13日

氏名(自署) 玉井 英利

学長候補補適任者の経歴・業績書

(ふりがな) 氏 名	た ま て ひ で と し 玉 手 英 利
生 年 月 日	1954 年 12 月 1 日 (64 歳)
現 住 所	山形県
最 終 学 歴	東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了 (東北大学 理博第831号)

経歴及び業績

年 月 日	事 項
・ 経 歴	<p>(学歴)</p> <p>1973年3月 宮城県仙台第一高等学校卒業</p> <p>1977年3月 東北大学理学部卒業</p> <p>1979年3月 東北大学大学院理学研究科博士前期課程修了</p> <p>1983年3月 東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了 理学博士号取得</p> <p>(職歴)</p> <p>1983年4月 山形大学医学部助手</p> <p>1985年4月 山形大学医学部を休職、米国Case Western Reserve University Department of Genetics, Research Scholar</p> <p>1987年4月 山形大学医学部助手に復職</p> <p>1989年4月 学校法人専修大学石巻専修大学工学部助教授</p> <p>1998年4月 学校法人専修大学石巻専修大学工学部教授</p> <p>2003年4月 山形大学理学部教授 (2015. 3まで)</p> <p>2006年4月 山形大学理学部生物学科長 (2008. 3まで)</p> <p>2008年4月 山形大学理学部副学部長・評議員 (2013. 3まで)</p> <p>2013年4月 山形大学理学部長・評議員・理工学研究科副研究科長 (2019. 3まで)</p> <p>2015年4月 山形大学学術研究院教授 (現在に至る)</p> <p>2016年10月 山形大学小白川キャンパス長 (現在に至る)</p> <p>(主な社会活動)</p> <p>環境省総合研究開発推進会議検討員 (1997～2007年度)</p> <p>山形県環境審議会委員 (2005～2012 年度)</p> <p>山形県特定鳥獣保護管理計画検討委員 (2006～2014 年度)</p> <p>山形県自然環境モニタリング総合検討委員 (2007～2012 年度)</p> <p>宮城県特定鳥獣保護管理計画検討評価委員 (2008 年度～現在)</p> <p>日本動物学会理事・庶務監事 (2011～2012 年度)</p> <p>山形県生物多様性地域戦略策定検討委員 (2012 年度)</p> <p>奈良県奈良のシカ保護管理計画検討委員 (2013 年度～現在)</p> <p>宮城県自然環境保全審議会委員 (2014 年度～現在)</p> <p>山形県特別天然記念物カモシカ保護管理計画地域通常調査指導委員 (2016 年度～現在)</p> <p>山形県環境アドバイザー (2017 年度～現在)</p> <p>(その他、東桜学館スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員、長井市史編纂事業執筆員など)</p>

<p>・業績</p>	<p>(主な学術論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Tamate HB and Takeuchi T. (1984) Action of the e locus of mice in the response of phaeomelanin hair follicles to alpha-stimulating hormone in vitro. Science 224, 1241-1242. 2. Tamate HB, Kuzumaki T, Suzuki J, Ishikawa K (1985) Immunological quantitation of tyrosinase from wild-type and albino mutant mice. FEBS Letters 183, 279-282. 3. Tamate HB, Hirobe T, Wakamatsu K, Ito S, Shibahara S, Ishikawa K (1989) Levels of tyrosinase and its mRNA in coat-color mutants of C57BL/10J congenic mice: Effects of genic substitution at the agouti, brown, albino, dilute, and pink-eyed dilution loci. Journal of Experimental Zoology 250: 304-311. 4. Tamate HB, Patel RC, Riedl AE, Jacobs-Lorena M (1990) Overproduction and translational regulation of rp49 ribosomal protein mRNA in transgenic Drosophila carrying extra copies of the gene. Molecular and General Genetics 221, 171-175. 5. Tamate HB, Tsuchiya T. (1995) Mitochondrial DNA polymorphism in subspecies of the Japanese sika deer, <i>Cervus nippon</i>. Journal of Heredity 86, 211-215. 6. Tamate HB, Tatsuzawa S, Suda K, Izawa M, Doi T, Sunagawa K, Miyahira F, Tado H. (1998) Mitochondrial DNA variations in local populations of the Japanese sika deer, <i>Cervus nippon</i>. Journal of Mammalogy 79, 1396-1403. 7. Li M, Feng Z, Tamate HB (2001) Molecular phylogenetic relationships among Sichuan snub-nosed monkeys (<i>Rhinopithecus roxellanae</i>) inferred from mitochondrial cytochrome-b gene sequences. PRIMATES 42, 153-160. 8. Li M, Wei F, Goossens B, Feng Z, Tamate HB, Bruford MW, Funk SM. (2005) Mitochondrial phylogeography and subspecific variation in the red panda (<i>Ailurus fulgens</i>): implications for conservation. Molecular Phylogenetics and Evolution 36, 78-89. 9. Saitoh S, Suzuki H, Hanzawa N, Tamate HB. (2011) Species diversity and community structure of pelagic copepods in the marine lakes of Palau. Hydrobiologia, 666, 85-97. 10. 玉手英利 (2013) 遺伝的多様性から見えてくる日本の哺乳類相:過去・現在・未来 (総説) 地球環境 18, 159-167. 11. Nakamura-Kojo Y, Kojo N and Tamate HB (2016) Spatial differences in arboreal activity of two rodents, the Japanese dormouse (<i>Glirulus japonicas</i>) and the small Japanese field mouse (<i>Apodemus argenteus</i>). Annales Zoologici Fennici 53, 81-90. 12. 奥田圭、藤間理央、根岸優希、TG ヒントン、TJ スマイサー、玉手英利、兼子伸吾 (2018) 福島第一原子力発電所事故後に逸出したブタはニホンイノシシへの遺伝子汚染をもたらしたのか 保全生態学研究 23, 137-144. 13. Matsumoto Y, Takagi T, Koda R, Tanave A, Yamashiro A, Tamate HB (2019) Evaluation of introgressive hybridization among Cervidae in Japan's Kinki District via two novel genetic markers developed from public NGS data. Ecology and Evolution 9, 5606-5616. 14. 鶴野一、小野寺レイナ、山田孝樹、大井徹、玉手英利 (2019) 四国で捕獲されたツキノワグマの血縁関係と繁殖履歴. 保全生態学研究 24 (印刷中) <p>(他 44 編)</p> <p>(主な著書・辞典等)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Tamate HB (2009) Evolutionary significance of admixture and fragmentation of sika deer populations in Japan. In "Sika Deer: Biology and Management of Native and Introduced populations", Springer, Tokyo pp. 43-59. 2. Tamate HB (2009) Comparative phylogeography of sika deer, Japanese macaques, and black bears reveals unique population history of large mammals in Japan. In "The wild mammals of Japan" SHOUKADO, Kyoto. pp. 136-139. 3. 玉手英利 (2009) 遺伝子の保護. 野生動物保護の事典 (野生生物保護学会編) 朝倉書店. pp. 26-31. <p>(他 単著 3 編 共著 5 編)</p>
------------	---

(注) 1. 年齢は、推薦締切日現在における満年齢とすること。

2. 最終学歴には、中退を含むものとする。

3. 用紙は、日本工業規格 A 4 判・縦型とし、2 枚以内で作成すること。

大学の運営等に関する所信書

氏名 玉手 英利

1. はじめに

国立大学は、少子高齢化、大都市への人口集中、グローバル化、Society5.0に代表される産業構造の変化などを背景として、いま、大きな改革を迫られています。社会がどのように変わろうとも、山形大学は人が人を育てる「学校」としての本質を見失わずに自己改革を行い、次世代を担う若者を愛情と包容力をもって育てたいと考えています。

以下では、総合科学技術・イノベーション会議「国立大学改革の方向性について」（第41回会議資料1-2）や文部科学省「高等教育・研究改革イニシアティブ」及び「研究力向上改革2019」などで示された国の方針・施策を踏まえて大学運営に関する自らの考えを述べます。

2. 大学ガバナンス

新たな知を生み出す社会的装置である大学は、創造的組織であるがゆえに、必然的にある程度の無秩序性を包含しています。その点において、大学ガバナンスにはコーポレートガバナンスとは異なる部分があることを心掛けなければならないと私は考えています。

山形大学では小山庄長のもとでガバナンス改革が大きく進みました。学長ガバナンスの実質化は国立大学改革の大きな柱であり、大学の機能強化を進めるうえで不可欠の要素ですが、その反面、国立大学の学長ガバナンスを監視・評価するシステムは、経営と教学が明確に分離された私立大学に比べていまだ脆弱だと私は感じています。社会から求められる大学ガバナンスを確立するためには、チェック機能も十分に働く必要があり、そのためには意思決定のプロセスや施策のアウトカムを学長が学内外に丁寧に説明することが重要だと考えています。

3. 第四期中期目標期間に向けた大学間の連携・統合の推進

「国立大学改革の方向性について」で示されたように、国立大学は経営力強化・教育研究力向上にむけて様々な連携・統合に取り組むことが求められています。これは、山形大学の最重要課題であり、2022年度からは第四期中期目標期間が始まることを考慮すると、連携・統合の検討と実施が決まった場合の計画策定は、かなりのスピード感を持って進める必要があります。

結論から言えば、私は連携・統合は不可避だと考えています。文科省は連携・統合のモデルとして、「1法人複数大学」のほかに「大学等連携推進法人」を構想として示しています。これについては、山形大学だけでなく連携・統合の相手となる他の高等教育機関と様々なステークホルダーが関わって検討することになるため、現時点で具体的な構想を述べることは差し控えますが、国公立私立大学の独自性を保ちつつ、入試、教育、研究、事務などでリソースを共有できる大学等連携推進法人には大きな関心を持っています。どのような連携・統合を選ぶにしても、学内外のコンセンサスを得ることが次期学長に課せられた最大の責務だと考えています。

4. 第三期中期目標期間中の国立大学運営費交付金改革

2019年度から国立大学共通の新しい評価・資源配分の仕組みが導入され、会計マネジメント、外部資金、若手研究者比率、TOP10%論文数、人事給与・施設マネジメントの共通指標に基づく評価と大学独自のKPI評価で運営費交付金の配分額が左右されるようになりました。これは第四期中期目標期間の交付金にも影響を及ぼすでしょう。第三期中期目標期間中は、小山庄長のもとで進められている評価指標に関する取組を継続・発展させてこの問題に取り組めます。特に、会計マネジメントについては、小山庄長の先見的施策によってキャンパス単位の会計マネジメントへの先行的対応がなされているので、それを継続・改善しながら、共通指標への対応を進めます。外部資金に関しては、飯田、米沢、鶴岡の3キャンパスでは総収入に対する外部資金比率が50%を越えるまでになり、山形大学の財務に大きく貢献しています。このような外部資金増につながる取組の重点的支援や適切な支出管理によって、強固な財務体質を実現するとともに、持続可能性を考慮した施設・設備の高機能化を進めたいと考えています。

5. 社会の変化に対応した教育

大学教育では「何を教えるのか」と「どう教えるのか」という大きな二つの課題が常に存在

します。「何を教えるのか」については、山形大学は基盤共通教育の創設や学部・大学院の改組などの教育改革を着実に進めてきました。一方、「どう教えるのか」については、情報化社会の飛躍的な変化に合わせて見直す時期に来ていると思います。私は現在、全学部の一年生を対象とした基盤共通教育の授業を行っていますが、学び方が大きく変わってきたことを実感しています。テストやレポートのやり取り、授業中のリアルタイムの学生からのコメント収集などは、スマホのWebClassで電子的に行い、学生はスマホで授業記録をとるようになりました。

ネット上で知識の共有化や自動翻訳が進み、人々がバーチャル空間で集合できる現代では、教室に学生を集めて教員が一方的に専門知識を伝授するだけの「講義」は意味を失いつつあります。人材育成の根幹がface to faceの教育であることはどの時代でも不変ですが、教育手法や学習支援体制については、将来を見据えて様々な可能性を検討する必要があると考えています。

6. 研究力の強化

研究力強化の方策に奇手はないため、先進研究拠点の形成・発展を支援するYU-COEを継続して、実績がある研究拠点への重点的支援と、新たな研究拠点形成につながるフィージビリティスタディの支援を行います。また、大規模大学のようなスケールメリットがない本学では、各キャンパスに散在する関連分野の研究者間のネットワーク形成を支援する取組も必要です。一例をあげると、社会的要請が急増するデータサイエンスでは、ネットワークのハブとなるデータサイエンス推進室を設置し、独創的な研究を生むコミュニティを作ろうとしています。

研究力強化には外部リソースの導入・活用も不可欠です。そのために、地域連携に関する各学部のパワーと実績を活かして、特色ある産学官連携事業を推進します。「学校」の枠外に踏み出す意欲的・挑戦的な地域連携・産業振興事業を支えるためには、情報発信とリスクマネジメントの体制も強化する必要があると考えています。

7. 国際性と多様性

国際性と多様性は大学の教育・研究を特徴づける重要な属性です。教育では、本学の学部・大学院で実施・計画中のジョイントディグリー・ダブルディグリーや国際交流プログラムを推進するとともに、OECD-AHELOで提起された「教育の国際的な質保証」をすすめて留学生の増加に結び付けたいと考えています。研究では、日本の研究者を再び国際舞台に立たせるために、若手教員による国際共同研究のスタートアップを重点的に支援します。多様性に関しては、ジェンダー、民族や宗教、ライフステージなどの多様性に適応できる大学づくりを進めることが、山形大学の社会的プレゼンスを向上させるうえで極めて有効な戦略だと考えています。

8. 明るく楽しい職場をめざして

大学ガバナンス改革でトップダウンが進み、意思決定の迅速化や全学的なリソースマネジメントではプラス効果が出てきた一方で、教員組織と事務組織の様々なレベルでボトムアップの機会は減り、現場では閉塞感と将来への漠然とした不安が広がっています。教員は管理的業務や外部資金獲得に追われるようになり、研究に専念できる時間がさらに減っています。大学業務の多様化で生じた事務職員の労働時間の増加はどの大学でも大きな課題となっています。これらの問題を解決するためには、運営費交付金が年々減るなかで人員や報酬を増やす量的な対応には限界があり、むしろ一人一人の働き方や組織の業務フローを変えるような質的対応が必要です。それには、教職員個々の自発的な改善努力を無駄にせず、それを評価し、組織全体で業務改善に関するgood practiceの共有化を進めることが解決の糸口になると考えています。

職場環境を向上させるために、教育職員には、組織内の役割分担や教員相互のバックアップ、若手教員の育成などを重視した組織運営をお願いしたいと考えています。事務職員には、大学運営を担うプロフェッショナルとしての誇りを持ち、特定業務に関する深い専門的知識を身につけて、教員と対等の立場でアイデアを出し合いながら業務を行っていただきたいと思います。明るく楽しい職場を実現するため、勇気ある教職員の積極的な改善努力を支援します。

9. おわりに

「我々は学業を捨てるべきではない。我々が学ぶこと、学びうる機会を最後まで守り通すこと、これが我々に課された責務である。」これは、仲間が学業半ばで学徒出陣するなかで、山形大学の前身の一つである旧制山形高等学校の学生の一人が述べた言葉です。令和がどのような時代になろうとも、学ぼうとする学生と、それに応えて教え続けようとする教職員がいる限り、山形大学の存在意義はますます強固になるものと私は信じています。